

根拠とともに何かを信じるということ

川口 嘉奈子

1. 序

古典的な知識の定義に則るならば、知識は以下のような仕方で記述されることになる。

(1) $\text{Kap} \Leftrightarrow \text{Bap} \& \text{Eap} \& p^1$

この定義にしたがい、根拠を伴う信念ならびに根拠を伴うとは限らない信念は、次のように表すことができるだろう。

(2) $\text{Bap} \& \text{Eap}$ (根拠を伴う信念)

(3) Bap (根拠を持たない可能性のある信念／信念一般)

私がこの論文で問題にしたいのは、知識や信念の根拠と一括りに呼ばれているものの正体である。(2)にあるように、 a にとって p の根拠があるということの本稿では「 Eap 」と表す。本稿では、実践的な発話における信念文にまで考察を拡張して、信念と根拠の関係や根拠の性質を分析する。こうして、根拠とともに信じるという状態をなるべく明らかにすることが本論文の趣旨である。

全ての信念に根拠が必要というわけではない。ただ何となく信じただけでも十分に信念である。ましてや、自分が信じている内容について尋ねられたときに、その信念を持つようになった正しい根拠を述べる必要などない。われわれが信念に関して何か間違いなく答えられることがあるとすれば、実際に信じているか、あるいは信じていないかということのみである。

しかしながら、実際の会話の場面で「どうしてそう信じるのか」と問うたとき、「何となく(信じている)」という答えを返されて感じる納得のいかなさは、「信じている」と言う際に理由や根拠が必要とされるような文脈の存在を感じさせる。

2. 根拠とともにある内容を信じるケース

根拠とともに何かを信じるということは、非常に単純な区別ではあるが二種類のモードに分けることができるだろう。すなわち、自分自身の心の内容について何かを信じるケースと、それ以外のケースである。このような分類をおこなったとき、後者のケースは広い意味で我々の世界内での社会的分業の一環とみなすことができる。それに比べ前者は、その信念内容の自明性にもかかわらず、何がその信念の根拠であると認められるかが第一に全く明らかでない。

それゆえまず、社会的分業のケースを分析することにしよう。新しく発見されたばかりの物質について、その分子構造の情報を得たいと思ったとき、われわれは化学の専門家に尋ねることによって信用に値する知識が得られる。このときは、もちろん、エキスパートから新しい情報を得るという獲得の側面がもっぱら前面に出ているのであり、その専門家が自分にとって信用できるかどうかを量るという信頼性の判断の側面は通常問題にならない。つまり、エキスパートである発話者は、一般的な話し手と同様に合理的であり、かつ悪意を持たないことに加え、知識量が十分であることについても確実視されている特別な話し手ということになる。当然ながら、情報元が書物等の場合でもこうした信頼は前提されるといえる。

ところが、情報元がどんなに優秀なエキスパートであったとしても、与えられる内容が正しいことが必ずしも論理的に出てくるわけではない。言い換えるならば、根拠が十分であることから内容の正しさが導出されるわけではない。通常の場合においてエキスパートの発言は十分に適切な根拠として認められるけれども、だからといってそれが表す内容と事実とが常に一致するわけではないとわれわれは理解している。Bap→p が成り立たないのと同じように、Eap→p

も成り立たないのである。

けれども、われわれはこの方法で新たに信念を得ることができ、その信念は根拠を伴っている。つまり、信念に関する十分かつ適切な根拠は、信念内容の正しさまでも保証しなければならないほど強いものである必要はないのである。

他方、自らの信念内容について尋ねられたとき、われわれは観察や推論によらず²とも何を信じているかを示すことができる。しかし、そうした信念の直接性にまつわる直観にしたがえば、われわれは「証拠無く」自らの信念内容について何かを信じることができるように思われる。

3. 「～を信じる」という発言の日常的な意味

われわれが何かを「信じる」もしくは「信じている」というとき、そこには異なる二つの信じ方が隠されている。それはこれまでに述べてきたような根拠の有無による違いもあるが、とりわけ「私は～と信じる」と発言する時、そのままの意味で受け取ることができない場合があるという点は重要である。本節では、具体例とともにより日常的な場面における「信じる」の使われ方を見ることにしよう。

3-1 根拠が足りない「～と信じる」——'Bip&¬Eip'——

この数週間、われわれの近辺を中心に連続窃盗事件が発生している。そんなある日、徹夜で遊んでいた私と親友のところに友人 A がやってきて、昨晚起こった窃盗事件の話 시작했다。そして A は親友について「彼は無実なの？」と聞いてきたとしよう。親友が以前万引きで警察に捕まったことがあったので、もしかしたら彼の仕業ではないかと疑っているのだろう。しかし、昨晚は夜通し一緒に遊んでいたのだから、私は「(親友は) 無実だよ」と答える。

ところが、同様のケースに際し「無実であると信じている」と答える人がいたら、われわれはこの解答をどう理解するべきだろうか。たんに「無実です」

とだけ答えればよいところを、「無実であると信じている」と言うからには、そのように言うべき理由があるのではないかといった推測をはたらかせるのではなかろうか。たとえば、昨晚の親友の行動を全て見ていたわけではないといった理由はそれなりの説得力をもつだろう。そして、通常の場合で「私が～であると信じる」と言うときには、事実として～であると言い切ることができない（もちろん、～でないとは言いたくない）ことを暗に示すことになるのである。これは信念に関する十分な根拠がない場合の「信じる」の用法でもあり、日常用いられている一人称的な「信じる」は概ねこのケースに分類されるように思われる。ある事実について、信じているのだけが知っているとまでは言いきれないことを発話するとすれば、「私は～を信じる」と言うことになる。この場合の「信じる」には、どこかしら疑問の余地が残されているのである。

3-2 根拠とともに「～と信じる」——'Bip&Eip'——

友人が私に「僕は巨人が優勝すると信じてるよ」と言ったとしよう。おそらく 3-1 で説明したとおりに、この友人は自らの発言内容が根拠不十分であることをわかって「信じる」を使っている。しかし、私とその発言に関する否定的かつ決定的な別の根拠（巨人が吸収合併されるとか、プロ野球が廃止されるなど）を手にしている場合に、「いや、私は巨人が優勝しないと信じる」と自然に言うことは難しい。なぜなら、友人の発言を否定できるだけの理由を持っており、巨人が優勝しないことが正しい信念であるのだとしたら、私は巨人が優勝しないことを「信じている」のではなく「知っている」としか言えないからである。それゆえ、友人に対しては、「巨人は優勝しないよ」や「私は巨人が優勝しないと知っている」と返すべきであろう。つまりわれわれは、根拠を伴う意味で「私は信じている」と自然に発話することは難しいといえる。

より詳しく述べるならば、もし私が十分な根拠とともに p と信じていて、それを一人称直説法現在形で発話する（「Bip&Eip」）ときに、同時に「 $\neg p$ 」と言うことはできない。もし言ったとしたらムーア文を発話することになる。そのため、 p の真偽に関して敢えて何か言うとしたら、 p である十分な根拠があるのだから「 p 」と言い切ってしまうてもいいように思われる。しかしそうしたとき

の発話内容は「Bip&Eip&p」になり、前述の定義に従えば、「Kip」と同じになってしまう。たしかに、Bip&Eip&¬p である可能性は残されているし、そのような仮定を私は受け入れることができる。にもかかわらず、「Bip&Eip&¬p」と直説法で述べることはできない。つまり、一人称的なある視点からは知識(Kip(=Bip&Eip&p))と根拠を伴う信念(Bip&Eip)の区別をつけられないことが、自然に根拠を伴って「信じる」と発話できないことの原因なのである。以上のことから、根拠を持って信じることを明示的に表現する一人称直説法現在形の自然な発話は存在しないように思われるのである。

3-3 根拠が不十分で「～と信じない」——'¬Bip&¬Eip'——

ある日ニュースを見ていたら、ナスカの地上絵が宇宙人によるものであることを裏付けるような証拠として、タコに似た生き物が地上絵を描いている写真が紹介されたでしょう。しかしこれを見た私は、宇宙人の存在を信じる気には到底ならず、そもそもニュースで流れる情報が全面的に正しいとすら思っていなかった。このニュースの話題が友人との会話にあがったとき、「ねえ、あれってほんとうに宇宙人が描いたのかな？」と半信半疑の友人に向かって私は「あのニュースを見ただけでは、私は宇宙人の仕事だとはとても信じられないよ」と答えた。

この発言によって私は、偶然見たニュースを根拠にして宇宙人が地上絵を描いたと信じることは不可能であると言いたかったのである。つまり、その内容を十分な根拠とともに信じているとは言いがたいと考えるような、ごく自然な信念状態である。これまで見てきたように、根拠を持たずに何かを信じること(Bip&¬Eip)は可能である。ところが、例文を発言したときの私は、宇宙人が地上絵を描いた(p)ことに関して、根拠を持たず信じることもできなかった(¬Bip&¬Eip)のである。したがって、「根拠が不十分なので私は～と信じられない」(¬Bip&¬Eip)という発話は、「根拠とともに信じる」の否定形であり、しかも対極にある用法とみなすことができる。(また、宇宙人が地上絵を描いたことを納得しうるような別の根拠が見つかったとすれば、信念変化は当然ながら可能である。そのとき私は「あのニュースでは信じられなかったけれど、宇宙人

を見た今なら信じられる」というように、自然に「信じる」と言えるかもしれない。))

3-4 根拠とともに「～と信じる」——'Bap&Eap'——

以上の例はどれも一人称の文であったが、他者の信念について語る三人称の「信じる」の場合にはどうなるだろうか。

天文学者のルベリエは、天王星の軌道を調査したところ、これまでに見つかった惑星以外からも引力を受けている可能性に気づき、計算によって天王星より外側にある未知の惑星の存在を確信した。その経緯をわれわれが述べるとするならば、「ルベリエは天王星の外側にもう一つ惑星があると信じるに至った³」となるだろう。このように、強い根拠を持って何かを信じると言う場合でも、他者の信念について述べるならば問題なく発話可能である。

4. 根拠はいかにして認められるか (分類しづらいケース)

4-1 敬虔な宗教家の信仰——Bap&Ea~p——

神の存在に正当な根拠が認められるか否かは別の議論に譲るとして、敬虔な宗教家 a が神の存在を確信していることは間違いない。その宗教家を指して「彼は神の存在を信じている」と言うことはおそらく正しい。a の信仰には疑いの余地がないように思われるからである。この点については、3-1 の根拠なく信じるケースに分類されることはない。しかし信仰には通常の意味での根拠が存在しない。それゆえ、すぐさま根拠とともに信じているケースに分類することもできないのである。(通常の意味での) 根拠はないけれども、宗教家にとっては疑いの余地がない信念。これは根拠を持って信じるケースか、もしくは根拠なく信じているケースのどちらに分類するべきだろうか。

あるいは、このケースはたんに全く根拠なく信じる、いわば「盲信」が徹底されているような状態と見るべきだろうか。これがそのような盲信のケースで

あるとすれば、宗教家は「神の存在を信じている」という発言によって、自分自身が神の存在を信じているけれども知っているとはまでは言えないということを示してしまう (cf. 3-1 節)。しかし、宗教家がこうした自滅的な信仰を持つとは考えにくい。むしろ「信じる」と口に出すことでも信仰が深まるような仕方で、神の存在を信じているように思われるのである。つまり宗教家の例は、自分がそう信じていると信じることによってさらにそれを信じることになるような、積極的な自己欺瞞のケースを含む「信じる」の用法であると考えることができる。神の存在についての信念が自己欺瞞的信念であるということからは、宗教家が神の存在(p)を否定する証拠を実際には持ちながらもそこから目を背けて、神が存在すると信じていることが帰結する。このように盲信を理解すれば、aはpでない根拠を持っているがpと信じていることになる(Bap&Ea¬p)。こうしたaによる強い盲信は、根拠に関する無矛盾性⁴が成り立つという前提で、根拠のない信念(Bap&¬Eap)を論理的に含意する。

5. 自分自身の信念とその根拠

「コーヒーを飲めば目が覚めると私が信じていることを私は信じる。」

通常の場面においてこのような発話は不自然かもしれないが、自分自身が有る信念を持っているということをその人自身が信じている状態を表すにはこう表現するしかない。これは自分が信じている内容についての反復的な信念である。よほどの事情がなければ、自分が持っている信念について誤りようはないように思われるだろう。例文のような信念の再認は誰もが行いうるし、そうして確かめられた反復的信念は正しいように思われる。この確度の高さから例文は、ひょっとすると根拠を伴った「信じる」の発話例であるかのように見えるかもしれない。ところが、このケースにも宗教家の例と同様の問題が潜んでいる。それは内省が通常の意味での根拠にはあたらないという可能性である。もしそうだとするならば、自分の信念に関する自己反省的信念は単なる「盲信」の連続ということにもなりかねない。もしくは、反復的信念や内省の正しさは自明であるので、それらを裏付ける根拠などそもそも必要ないという見方もあ

る。後者の場合には、自分自身の心的内容が根拠なく成立する真なる信念の一つに数えられることになるが、それは同時に第一人称の特権的性質の一つとして信念に関する直接性と不可謬性を認めることになる。この点については、スマリヤンが提示した次のような例を整理することで問題がより明らかになるだろう。

数週間前、色覚の機能に異常を覚えたフランクは眼科に行った。彼の色覚異常はたとえば赤くない本が赤に見えるといった症状であったが、治療により彼の色覚は完全に回復したため、眼科医はそのことをフランクに伝えた。数日後、フランクは実験的認識論者と名乗る博士の研究室に行った。そこで博士は、フランクの目の前に本を差し出して「この本は何色かね？」と聞いた。フランクは色覚の異常を経てからというもの、色に関して断言することを控えるようになっていたため「僕には赤に見えます」と答えた⁵。

ここまでで、まず、眼科医の「もう治っている」という発言をフランクが信じていないか、少なくとも根拠不十分とみなしていることがわかる。そのため、フランクは自分自身の知覚に基づく信念、本が赤い(p)を断言できない(Bip&-Eip)。フランクの「僕には赤に見えます」という答えに対して、博士は「違う」「間違っている」と断言する。どうして僕自身の心の内容に関して断言できるのかと問うフランクに、博士は自ら開発した脳検索装置を紹介する。その装置は驚くべきことに、人間の脳の中身を読み取ることができるため、他人の信念と言えども完璧に知ることができるというのだ。そしてその装置によると、この本がフランクには赤に見えるはずがないという。そこでフランクは前の発言を取り消して「僕はこの本は赤いと信じている」、また「僕はこの本が赤いと信じていることを信じている」と言うことにした。しかし装置によるとこれらの発言も間違いである。困惑するフランクに博士は、フランクの信念が間違っているのではなく、フランクの発話する信念文が間違っているだけだと告げる。しかも博士が言うには疑惑の本は赤であり、フランクは「見える」とか「信じている」などとは言わずに、たんに「赤です」と答えていれば正しかったのだ⁶。

脳検索装置は外部にありながらも、自分自身よりも自分の信念について正しく知ることができるような装置である。これはいわば人間の信念に関するエキ

スパートであり、自ら反復的に得るタイプの信念よりも、他者（機械だけでも）が他人の信念について語ることのほうが正確な可能性がある場合の一つであろう。さて、この装置によると、「僕には赤に見えます」「僕はこの本が赤いと信じている」「僕はこの本が赤いと信じていることを信じている」の信念発話は全て不適切であり、「この本は赤です」だけが正しいことになっている。これらを信念の根拠に着目して再考してみよう。「僕には赤に見えます」「僕はこの本が赤いと信じている」の二つの発言は、どちらもなんらかの根拠不十分を示す発話例（Bip&-Eip）である。これは2節で述べたように、フランクが確信を持って本が赤いとは言いきれない状況を表していると考えられる。なので、これらの発言が間違っていて、機械の言うとおりのフランクは「（本は）赤です」というべきところであるとすると、フランクは本の赤さを証拠を持って信じている（Bip&Eip）ということになるだろう。この状況は少し変則的である。実際にフランクの目は治っていて、かつ本が赤であることについての十分な根拠があるのに、本人はそれに気づいていない状況（Bip&Eip&-BiEip）⁷である。それどころか、2節で指摘したように、一人称的な信じるという発話が根拠のない信念を述べるものであるとすれば、「僕はこの本が赤いと信じている」という誠実な発話は根拠なく本の赤さを信じているという意味の発話になる。結局、フランクの状況を整理すると、彼は本が赤いと信じていて、そう考える証拠を実際にはもっている（赤く見える証拠がある：Eip）。ただ、赤く見える証拠が十分であるのに、フランクにとっては十分ではないと誤って思わせる何かがあるのだ（Bip&Eip&Bi-Eip）。

「僕はこの本が赤いと信じている、と信じている」は反復的信念の発話である。前半の「僕はこの本が赤いと信じている」は、Bip&-Eip と解釈すると、これまでの経緯からいえば偽である。では、その信念の発話を「僕が信じる」ことはいつでも正しいと言えるだろうか。また、自分が何かを信じていることを信じていることが、いわゆる一人称の特権によって保護されているという直観は正しいだろうか。

「僕はこの本が赤いと信じる」を Bip&-Eip と解釈するならば、反復的信念に関する問題の発話は Bi(Bip&-Eip)&-Ei(Bip&-Eip)と表される。B のオペレータに関する分配法則を認めると、これは BiBip&Bi-Eip&-Ei(Bip&-Eip)と同値で

ある。したがって問題のケースは、内省能力($Bp \rightarrow BBp$)や不可謬性($BBp \rightarrow Bp$)に対する反例にはならない。こうして、フランクの発話の状況は、自分の信念に関する直接性や不可謬性の問題というよりも、自分の信念の根拠の十分性にかかわる誤解が発生していた状況とみなすことができる。

ヒルピネンは反復的信念の妥当性($Bp \rightarrow BBp$)⁸を容認しつつも、 $Bp \& Ep \rightarrow BEp$ が成り立たないと主張することによって、反復的知識が常に保証される($Kp \rightarrow KKp$)わけではないことを示そうとしている。彼によれば、自分が気づいていないだけで実際には十分な証拠となる情報を持っているようなケース($Bip \rightarrow Bip \& Eip \& \sim BiEip$)が「あきらかに」存在しているのである⁹。上に述べたフランクの状況は、その一つの具体例とみなすことができるだろう¹⁰。

註

- ¹ 知識の古典的定義の中に見られる正当化の要請の項目(「a が p についての適切な根拠を持つ」)を、ヒルピネンは「Eap」と表現している。詳しくは Hilpinen(1970)を参照のこと。また本稿では、頻繁に使用するいくつかの表現を、簡略化のためにアルファベットを用いて表している。信念のオペレータとして「B」、知識のオペレータとして「K」、命題の名前として「p」を用いる。「a」は三人称的な信念主体、「i」は一人称的な信念主体を表すのに用いる。
- ² ここでは、自分の信念について観察や推論によらずに知ることができるということを、Anscombe(1957)と同様の意味あいで使用している。
- ³ この発話は最後の「信じるに至った」という部分にルベリエの信念変化を含んでおり、彼の心の内を表現しようとしている。これはまさに、ルベリエは海王星の存在を「知っている」のではなく「信じる」ことを適切に表しているといえるだろう。
- ⁴ 根拠に関する無矛盾性は $Ep \rightarrow \neg E\neg p$ で表される。
- ⁵ スマリヤン『哲学ファンタジー』96～97 頁より要約。
- ⁶ 同書、97～103 頁より要約。
- ⁷ スマリヤンのテキストにおいては、最終的にフランクは精神分析医により「本心から赤いとは信じていなかった」とまとめられる。一方拙論においては、「赤いと信じていたのは間違いないが、本当は根拠も十分だった」と解釈している。いずれもフランクの「赤いと信じている」発言を否定する解釈ではあるが、この違いは重要であるように思われる。
- ⁸ $Bip \rightarrow BiBip$ は Hintikka(1962)においても認められる。
- ⁹ Hilpinen(1970,p.111-114)を参照のこと。
- ¹⁰ ヒルピネンは $Bp \rightarrow EBp$ をみとめているが、本節での E のオペレータの解釈にしたがえばこれは認められないことになる。

文献

- Anscombe, G. E. M., *Intention*, Harvard University Press, 1957. (菅豊彦訳『インテンション』産業図書、1984年)
- Hilpinen, R., "Knowing that one knows and the classical definition of knowledge", *Synthese*, 21, 1970, pp.109-132.
- Hintikka, J., *Knowledge and Belief*, Cornell University Press, 1962. (永井成男、内田種臣訳『認識と信念』紀伊国屋書店、1975年)
- 伊勢田哲治『認識論を社会化する』名古屋大学出版会、2004年
- R. スマリヤン；高橋昌一郎訳『哲学ファンタジー』丸善株式会社、1995年 (Smullyan, R., *5000B.C. and Other Philosophical Fantasies*, St.Martin's Press, 1983)
- Wittgenstein, L., *Philosophische Untersuchungen*, Basil Blackwell, 1953. (藤本隆志訳『ウィトゲンシュタイン全集 8 哲学探究』大修館書店、1976年)

(かわぐち かなこ／千葉大学)